

主 題：神の子どもとされる

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章14-16節

今日は、ローマ人への手紙8章14節から学んでいきます。

ローマ8章「:14 神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださいの御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。:16 私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。」

パウロはこれまで、私たちイエス・キリストを信じる者たちに与えられている祝福について語って来ました。私たちイエス・キリストの恵みによって救われた信仰者一人ひとり、神からすばらしい祝福をいただきました。皆さん、私たちは永遠に罪が赦されたのです。そして、私たちは死んでもよみがえりこの主とともに永遠を過ごす。これ程大きいすばらしい祝福を私たちはいただいたと、そのことを語ったパウロは、これがただの気休めでないことを証明しようとするのです。なぜなら、私たちがこのような神がくださったすばらしい祝福の約束の上にしっかりと立って生きるなら、私たちの生き方が変わって来るからです。もし、私たちが神の約束にしっかりと立って生きて行くなら、私たちの毎日の生活、私たちの人生がよりすばらしいより希望にあふれたものになっていきます。そのことを今私たちは賛美しました。聖歌464番はこのように歌っていました。「われ世にある限りイエスを誉め歌わん、天つ国に行かばなお歌わん。うるわしき笑顔と力ある御手もて、常に導きたもうイエス君の愛の深さ広さ、我歌わん」と。私たちは地上にいても神のすばらしさを歌い、天に上がればなお続けて神のすばらしさを歌い続けて行く、そのようにして私たち信仰者は永遠を主とともに生きるのです。

あのファニー・クロスビーという盲人の姉妹はたくさんの曲を書きました。その中の一つ、私たちがよく歌う曲ですが、聖歌232番は「罪咎を赦され、神の子となりたる。わが霊の喜び比べ得るものなし。日もすがら証せん、夜もすがら主を誉めん、『み救いは妙なり、み救いは奇し』と。」、私は一日中、この神のすばらしいみわざを誉め称え、夜通しこの神を誉め称える。なぜなら、この神が為してくださったすばらしい救いは、口に出せないほど表現できないほどすばらしいものであり、私たちが理解することが出来ないほど大きなみわざだからです。ファニー・クロスビーが書いたこの曲はすばらしい日本語訳ですが、彼女が書いた歌詞をそのまま訳すと、このような意味があります。「すばらしい確信、主イエスは私のものである。私は前もって神の栄光を少し経験することが出来る。なんとすばらしいことか。救いの相続人、神によって買い取られた者、主イエスの御霊による誕生、主イエスの血潮によるきよめ、これが私の証、これが私の賛美、私は私の救い主を一日中誉め称える。」と。

神の恵みを覚えている人たち、神の恵みによって救われたことを喜んで人たちは、神の祝福を覚えている人たちは、この地上にいて主を誉め称えながら生き、そして、彼らは間違いなくその主のもとにあって主を誉め称え続けているのです。信仰者の皆さん、あなたはそのような希望をもって、神が与えてくださった祝福をしっかりと覚えて、その主を称えながら生きていらっしゃいますか？もし、私たちがこの救いの確信をもっていなければ、恐らく、あなたの信仰生活は様々な恐れと不安の連続だと思えます。先のことが不安で仕方がない、どうなっていくのか？どうなってしまうのか？と。だから、私たち信仰者はしっかりと神の約束の上に、神のみことばの上に立たなければいけないのです。パウロはそのことを私たちに教えてくれるのです。ですから、彼が私たちに教えようとしているみことばをしっかりと見て行きましょう。

14節のみことばを見る前に、残念ながら、新改訳聖書ではこの14節と15節の原語に記されている接続詞が抜けています。つまり、「なぜなら」という接続詞です。14節を原語から直接訳すとこのようになります。「なぜなら、だれでも神の御霊によって導かれ続ける者は神の子である。」、15節は「なぜなら、あなたがたは再び恐怖へと導き入れる奴隷の霊を受けたのではなく、養子の霊を受けたのである。その霊によって私たちは「アバ、父。」と呼ぶのである。」と。気付いていただきたいことは、14節にも15節にも「なぜなら」という接続詞が付いていることです。ということは、明らかに、その前の節と14節でパウロが言わんとしていることは関連しているのです。パウロは13節で「救われている人の特徴」を述べました。「御霊によって、からだの行いを殺すなら、」と記されています。からだの行ないを殺し続ける者、つまり、罪から離れて神に喜ばれるような正しい生き方をしたいと、そのような思いをもって生きている人々、その人たちは「生きるのです。」とパウロは言います。この「生きるのです」ということばはもうすでに見ましたから詳しい説明はしませんが、「永遠のいのち」のことです。

ですから、パウロは13節で「永遠のいのちをいただいている人はこのように神に対して正しく生きる。そのような人たちである。」と、つまり、救われている人々の特徴を教えたのです。そして、14節は「生きるのです」と彼が教えたその結論の根拠を述べるのです。だから、「なぜなら」と言うのです。「このような人々は永遠に生きる。なぜなら、このような理由があるから。」と。その理由をパウロは14節でこのように言っています。「神の子どもです。」と。皆さん、これです。神の子ども、神に愛され神に守られている、子として扱われている大切な存在だと言うのです。パウロはこの後、15節も16節も神の子どもにされたということがどのようなことか、どんなにすばらしい祝福か、そのことを教えてくれるのです。罪の奴隷だった者が神の子どもとされるのです。

今日、私たちが見て行きたいのは、この14節から「神の子」であることの三つの証拠です。つまり、このような証拠を自らに照らし合わせる時に、あなたが真に神の子であるかどうか分かる、言い方を変えるなら、あなたの信仰が本物かどうかはこのような特徴を見て、そして、それを自らに問いかけてみるならばはっきりするということです。パウロは何度もそのことをして来ました。パウロの読者たち、ローマにいる人々に対する思いが伝わって来ます。「あなたたちは本当に救われていて欲しい。頭だけで理解して救いを逃してしまうようなことがあってはならない。みなを救われて欲しい。」と、その願いをもってゆえに、パウロは繰り返して「あなたの信仰は大丈夫ですか？」と聞くのです。そして、ここでも彼はそのことを問い掛けるのです。救われている人、それは神の子である。そして、あなたが真に神の子であるかどうかは、次の三つのことを考えなさい、これが神の子の特徴だからと、その三つをパウロはここで教えるのです。

☆「神の子」であることの三つの証拠 14-16節

1. 主なる神のご支配をいつも望んでいる 14節
2. 主なる神との交わりを喜ぶ 15節
3. 主からの保証をもっている 16節

1. 主なる神のご支配をいつも望んでいる 14節

初めに14節「神の御霊に導かれる人は、」ということを見ましょう。パウロが何を教えているのか、それを理解するために、私たちは二つのことに注意しなければいけません。それは「導かれる」ということばの意味とこのことばに使われている文法、文法的な解釈です。

1)「導かれる」の意味

このことばの意味は二つあります。一つは「信者を導いて行く」、もう一つは「信者を支配する」です。

(a) 信者を導く

確かに、聖霊なる神、ここで言われている神の御霊は信じる者たちを導かれます。イエス・キリストがご自分の十字架についてご自分の復活について話をしたときに、弟子たちは良く理解しませんでした。そこでイエスはこのように言われました。ヨハネの福音書16:13a「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。」、イエスはここで聖霊なる神が与えられるなら、あなたがたはわたしが話していたことを正しく理解することが出来ると言われたのです。そして、実際にペンテコステ以降その働きが始まったのです。聖霊なる神は教師として私たちに大切な真理を教えてくださいます。確かに、そのようにして聖霊は私たちに教えてくれています。だから、イエスを信じる前には聖書を理解できなかった人が、イエスを信じた後、少しずつ分かって来ます。私たちがその大切な真理を理解することができるように、聖霊なる神が私たちに助けを与えてくれるのです。ですから、確かに、聖霊が導くと言えるのです。もちろん、このように真理において導かれるだけでなく、私たちの歩みにおいてもいろいろな導きをされます。例えば、パウロが宣教に行く時も神は様々な方法で彼を導かれました。彼がムシヤというところに来たとき、「こうしてムシヤに面した所に来たとき、ピテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」と、使徒の働き16:7に書かれています。その前の16:6には「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。」と記されています。ですから、このように彼らがしようと思うことを聖霊が止められることもあったのです。そして同時に、その後何が起こったのかということ、彼らはムシヤからトロアスへと行きます。そして、そこから彼らは初めてヨーロッパへと進んで行くのです。ヨーロッパ伝道の始まりです。そのように神は、ある時に門を閉じられたり、また、開かれたりして人々を導かれます。確かに、パウロはそのようにして神に用いられて行きます。

あのペテロもそうでした。思い出しませんか？ペテロとコルネリオのこと、同じ「使徒の働き」に記されていることですが、ペテロ自身に神がお働きになります。10:10-20「すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりとして夢ごちになった。:11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。:12 その中には、地

上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。:13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」という声が聞こえた。:14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」:15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」:16 こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。:17 ペテロが、いま見た幻はいったいどういうことだろう、と思ひ惑っていると、ちょうどそのとき、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家をたずね当てて、その門口に立っていた。:18 そして、声をかけて、ペテロと呼ばれるシモンという人がここに泊まっているだろうかと思ねていた。:19 ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。:20 さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」。そして、神はペテロとコルネリオが会うように導かれたのです。このような例はいくらでも上げることができます。

(b) 信者を支配する

確かに、聖霊なる神はそのようにクリスチャンたちを導かれて行きます。そのような働きを為さいます。そこで私たちが考えなければいけないことは、パウロがこのローマ8章で言っていることが、このような神による私たちの日々の生活における導きなのかどうかです。よく見て行くと、ここで言われている「導き」とは、私たちの日々の生活において神が信者を導くというよりも、「信者を支配する」という意味で使われているように思えます。その理由を説明します。その前に、ウエストミンスター組織神学の教授だったジョン・マレーは「霊によって導かれるということは、彼らが霊によって支配されていることを含意する。」と言っています。果たして、聖書がそのように言っているのでしょうか？

まず、ガラテヤ人への手紙の中に、今私たちが見ていることを理解するヒントがあります。5:18 にパウロはこのように記しています。「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」と。今、私たちがローマ書で見ている「御霊によって導かれる」ということばをここに見ることが出来ます。パウロはどのような意味でここでこのことばを用いたのでしょうか？この18節の前の16-17節を見ると、パウロは「御霊によって歩むこと」と「肉によって歩むこと」の二つの生き方を対比しています。そして、18節へと続けているのです。ですから、「御霊によって導かれる」ということは、「御霊によって導かれる」ということは、これまで話して来た二つの生き方なのです。言い方を変えるなら、「御霊によって導かれる」、つまり、「御霊の下にあるあなたがたは律法の下にはいません。」ということなのです。文脈から見るとそのような解釈をすることが出来ます。そして、私たちはもうすでに6章でこの「下」という前置詞がどのような意味をもっているのかを見ました。ローマ6:14を見ましょう。「**というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にあるからです。**」、この「下」とは「力、支配」を指すことばであると見ました。ですから、パウロはここで「あなたがたは律法の支配ではなく恵みの支配にある」と言ったのです。ですから、ガラテヤ5:18で見たことは、私たちは律法の支配の下にはいない、聖霊の支配の下にいる、あなたは聖霊の力の下にいるということなのです。パウロはそのように私たちに教えているのです。ですから、ローマ8:14の「**神の御霊に導かれる人は、**」とは「聖霊なる神の支配を受けている人、聖霊によって支配されている人たち」であるとパウロは教えているのです。

2) 「導かれる」の文法的な態

もう一つ、このことばを文法的に見ることが大切です。パウロはこの「導かれる」という動詞を受動態で使っています。なぜでしょう？パウロは明らかに次の二つのことを教えたかったからです。皆さん、今日はそのことをしっかり見て置いてください。そのことを教えるために、パウロは敢えてこの大切な中心のことばを受動態で用いたのです。受動態を用いることによって、この働きは「神の働き」だということを言いたかったのです。「支配する」という働きは「神の働き」です。同時に、彼は受動態を用いることによって、これは確かに神の働きであるが、そこには「信者の責任」があるということも教えたかったのです。ですから、「神の働き」と「人の責任」、この二つのことを受動態を用いることによって伝えようとしたのです。

(1) 神の働き

パウロは最初に、この支配するという働きは「神の働き」であることを言わんとします。先に13節で私たちは、神の助けをいただきながら神に対して正しく生きようとするのは救われている証拠であると見ました。14節になると、聖霊に支配され続けること、これは「導かれる」ということばが現在形だから「聖霊によって満たされ続けて行く」ということになり、これが「救われている者、神の子どもの特徴」だと言うのです。私たちも目的のためにたまにこのような「態」を使います。このような表現は余りしませんが、敢えて、「私は彼によって助けられ続けている。」と、これは「私は自分で自分を助けて

いるのではない。私は人によって助けをいただいている」ということです。また、このような表現はどうですか？「私は彼によって毎週教会に連れて来て貰っている。」と言ったときは、私が人の助けを借りずに自分で教会に来ているのではなく、ある人に連れて来て貰っている、だから、「受け身」なのです。自分がしているのではなく、自分はその行為を受けているのです。パウロが言いたいことは、この「聖霊によって導かれ続ける、支配され続ける」ということは、あなたの働きではなくて、聖霊なる神があなたのうちに為される働きだということです。だから、受動態なのです。そのことを言いたかったのです。

なぜ、神がそのような働きをするのかということを考えるなら、ここが受動態であることが分かります。なぜ、神が信仰者であるあなたを支配し続けて行かれるのでしょうか？その理由は、聖霊があなたを支配することによって神の栄光が現わされるからです。そのためにあなたは造られたのです。そのためにあなたは救われたのです。あなたが今信仰者として生きているのは、あなたを救ってくださったあなたを愛するこの偉大な神が、どんなにすばらしい方であるかをあなたが世に明らかにして行くためです。その働きを神が為すために、神はあなたを支配しようとしておられるのです。

今私たちが見ていることをもう少し理解するために、ガラテヤ人への手紙5：19－24を見てください。ここには二種類の生き方のその結果が記されています。パウロは「律法の下にいる人」と「御霊の下にいる人」、すなわち、罪の支配下にいる人と聖霊なる神の支配下にいる人を対比しています。ですから、19節には「**肉の行いは明白であって**」とあり、22節には「**御霊の実は**」と書かれています。19節から21節には「**神の国を相続しない者の特徴**」が記されています。つまり、救われていない人の特徴です。それは「**19 肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。**」、イエス・キリストを信じておられる皆さん、イエスを信じていながらここに書かれている様々な罪を犯してしまったことがあるはずですよ。そうすると救いを失うのでしょうか？聖書はそのようなことを教えてはいません。なぜ、そう言い切れるのでしょうか？「**こんなことをしている者たち**」とありますが、この「**している者たち**」ということば、パウロはこの動詞を現在形で記しています。つまり、パウロは「**こんなことを継続して続けている者たち**」と言って、その人の生き方、その特徴をこのように表現したのです。ですから、一度や二度、三度、四度、単発的にというものではありません。このような生き方をずっと継続して行っている人です。その人は「**神の国を相続することは**」ないと言うのです。「**相続する**」とは未来のことです。そういうことは絶対にあり得ないと言っているのです。

ですから、はっきりしています。永遠のいのちをもらっていない、永遠のさばき、地獄に行く者たち、彼らはこのような罪の中を継続して習慣的に歩み続けている、これがその人たちの特徴なのです。パウロははっきりと彼らには永遠のいのちはない、救いはないと言っています。

22－24節を見ると、今度は「**神の国を相続する者たちの特徴**」を教えます。「**22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。**」、ここで私たちがしっかりと見たいことは「**十字架につけてしまった。**」という動詞です。これは不定過去です。もうすでに過去に起こった現実の事実を強調しているのです。こういうことがあったということです。それは「**私は自分の肉、それらのすべてを十字架につけてしまった。**」と、つまり、「**もうかつての私は死んだ！そして、キリストとともに私は生まれ変わって新しくよみがえった。**」と言うのです。これは「**救いのこと**」です。22節に「**御霊の実は**」とあります。「**聖霊の実は**」、このような表現をしているのは、聖霊なる神がこのような実をもたらすということです。この「**御霊の実は**」の元になっているもの、原因となっているものは「**聖霊**」だと言っているのです。

もう一つ面白いことは、ここに出て来ている九つの実は単数で書かれていることです。つまり、聖霊なる神をいただいている人には、この九つの実が一つのパッケージとなって与えられているということです。「私は1と2と3は持っていますが4と5と6はありません。」ということではないのです。イエスを信じた者たちにはみな、これらが一つのパッケージとなって与えられているのです。だから、聖霊なる神をいただいた人は、聖霊なる神がこのような実を実らせて行くから、これらの実が与えられるのです。そのためには聖霊が私たちを支配していなければいけないのです。そうでなければ、このような実が豊かに実って行くことはないのです。ですから、なぜ、聖霊なる神に支配されることが私たちにあって大切なのか？私たちが神の栄光を現わす者となって行くためです。このガラテヤ書で教えるように、あなたが聖霊によって支配されるなら、あなたはこのような者へと変えられ続けて行くのです。

余談になりますが、この九つの実を見るとこれらは三つに分かれます。非常に面白いのは、最初の三つ「**愛、喜び、平安**」は「**人の心に関するもの**」です。このような心をもつ者になる。そして、「**寛容、親**

切、善意は「周りの人たちへの態度」です。このような人によって変わって行きます。最後の三つ「**誠実、柔和、自制**」、これは「その人の行ないに関するもの」です。つまり、救われたなら、そして、聖霊があなたを支配しているなら、あなたは心を変えられて行き、あなたの周りの人々に対する態度も変わって行き、あなた自身の行ないも変えられて行くと言うのです。そのような働きを神はあなたのうちに始められたのです。そして、その働きを神は継続して行こうとするのです。だから、私たちはこの方に支配され続けることが必要なのです。そのことをパウロは言わんとしたのです。

思い出しませんか？「**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。…**」、Ⅱコリント3：18のみことばです。信仰をもったあなたは、イエスを信じたあなたは、このような働きを経験するのです。あなたのうちにおられる聖霊なる神が、あなたを主イエスに似た者へと日々変えて行くという働きです。つまり、これは「**聖化**」の働きです。「**聖くなって行く**」ということです。だれの働きですか？今敢えてその部分を飛ばして読みました。「**これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**」と、聖霊なる神がこのような働きを為してくれるのです。

皆さん見えて来ませんか？聖霊はあなたを支配しようとするのです。なぜでしょう？あなたが支配され続けるときに、あなたは神の栄光を現わすからです。あなたは変えられて行くから、主に似た者に変えられて行くからです。あなたの心を変えられ、あなたの態度を変えられ、あなたの行ないが変えられて行く、そのような働きを主は為そうとしているのです。だから、聖霊に支配されている人々、その人たちの特徴は「**神に従順に従って行こうとする**」のです。なぜなら、従順に従うことによって神が喜ばれるからです。従順に従うことによって神の栄光が現わされて行くからです。神に喜ばれたい、神の前に正しい生き方をしたい、そのカギは聖霊があなたを支配することです。

マルチン・ルターはこのように言っています。「**神の霊に導かれるとは、自由に進んで、肉、すなわち古い人、すなわち、神でないすべてのもの、自分自身さえも殺し、軽んじ、否定し、地の空しい喜びも、その汚れた不潔な略奪物も捨てるのである。これは本性から出ているものではなくて、我々のうちにおられる神の霊の働きである。**」と。このように生まれ変わらせ、このように変え続けて行くことは、私たちのうちにいる聖霊なる神の働きである。神はそのような働きを為して行くと言うのです。だから、なぜパウロが「**支配され続ける**」ということばを受身にしたのか、皆さんもお分かりでしょう？神のすばらしい働きです。同時に、二つ目のポイントがあります。

(2) 信者の責任

確かに、支配することは神の働きですが、そこに私たち信者の責任もあるということです。私たちクリスチャンは神が私を変えようとしているから「**どうぞやってください。ご勝手にどうぞ。私の本意ではありませんが、そのようにしたいのならどうぞ。**」と、私たちはそのような態度で生きるものではありません。最初に話したあの受け身の例を思い出してください。私は彼によって助けられ続けて行く、それは私が自分で自分を助けているのではない、人によって助けられていると。でも、そこでもう一つ私たちが覚えておかなければいけないことは、私が助けを求め続けているから助けられ続けているということです。私は彼によって毎週教会に連れて来て貰っていると言うときに、私が人の助けを借りずに自分で教会に来ているのではなくて、ある人によって連れてきて貰っていると、それは確かにそうなのですが、それは私が毎週教会に行くことを要望し続けているからです。

だから、私たち信仰者にはどのように生きるかという責任があるのです。全部神のわざだから「**もう神にお任せして…**」ではないのです。私たちには私たちの責任があるのです。ですから、聖書を見たときに、みことばは何度も私たちに「**こうしなさい**」と言います。「**このように生きなさい**」と言います。それは私たちに責任があるからです。イエスを信じて、イエスを愛して歩んでいる皆さんは、間違いなく、この神に喜ばれたいという思いをもっているはずですが。私の考えていることも、私の想像することも、私の口にすることも、私の態度もすべてが神に喜ばれたいと。詩篇の著者が「**私の心の思いが神のみこころにかないますように。**」(104：34)と言ったように、彼の願いは「**私の考えること、思うことが主のみこころにかなって主が喜んでくださること**」、彼はそのことを望んだのです。ですから、この詩篇の著者も神に喜ばれたいという思いをもち、同時に、自分には選択して行く責任がある、正しく歩んで行く責任があるということを忘れていなかったのです。神の前に正しく生きて行く、失敗したら告白して歩み続けて行く、神が喜んでくださることを継続して行く、そのように生きて行くという責任が信仰者である私にはあることを忘れてはならないのです。

なぜなら、そのように生きて行くことによって、最初に話したように、あなたが救われた目的、あなたが創造された目的、つまり、神の栄光を現わすということがそのときに可能になるからです。そして、そのように生きて行くことを神が望んでいらっしゃるのです。皆さん、私たちは何度も失敗して来まし

た。神に喜ばれたいと思って歩み始めたのにそれと逆のことを繰り返して来ました。ですから、13節で教えられたように私たちには「神の助けがいつも必要」なのです。私たちは継続して神の助けを求め続けて行かなければいけないのです。自分の力で神に喜ばれる歩みを為して行くことは不可能だからです。皆さん、感謝なことに神の助けは常に備えられているのです。詩篇46：1に「**神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。**」とあります。神は私たち信仰者に問題のない人生を約束したのではありません。悩みのない人生を約束したのではありません。却ってそれとは逆に、信仰をもって神に忠実に従って生きようとするなら、いろいろな問題がやって来ます。いろいろな迫害、困難がやって来ます。神の約束は「そのような問題には会わない」ではありません。その問題の中にあつて「神であるわたしがあなたを助ける。」と言われます。同じ詩篇の著者はこのように言います。121：1-4「**私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。：2 私の助けは、天地を造られた主から来る。：3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。：4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。**」、私たちの神は私たちのように話を聞いている途中でうとうとするような方ではない、「眠らない」と言います。神はいつもあなたを覚えてあなたに助けを与えようとしてくださっている。神はいつも備えが出来ていると言うのです。それが私たちの神です。人々はそれを見て、この神に助けをいただきながら信仰の歩みを歩んだのです。

今日、私たちがこの14節のみことばから学んだことをまとめるとこのようになります。

私たちが信仰生活を歩んで行くために神の助けが必要です。しかし同時に、私たち信仰者一人ひとりが選択をして、決心をして、そして、行動して行くことも大切なのです。私たち一人ひとりは何が正しいのか、何がみこころなのか、しっかりと見分ける判断力が必要です。それだけでなく、そのみこころに従って歩み始めようとする決心と行動が必要なのです。もちろん、主の助けを仰ぎながらです。なぜなら、皆さん、先程見たガラテヤ人への手紙5章の中にこのような命令がありました。5：16「**私は言います。御霊によって歩みなさい。**」、これは命令です。「**そうすれば、…**」結果です。「**決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。**」と、このような結果が約束されているのです。でも、肉に打ち勝つため、罪に勝利して行くために、もちろん、私たちは完全ではありませんが、勝利を得るためにはこのようにしなければいけないと教えられているのです。それは「**御霊によって歩みなさい。**」です。だから、私たちが本当に勝利を得よう、勝利ある生活をしようと思えば、そのような生き方を選択し、そのように歩み始めなければ不可能です。

聖書を見ると、イエスは何度もその大切さを私たちに教えてくれます。最後に、その中の一つを見て終わりたいと思います。イエスはエリコにやって来られました。そして、それからエルサレムへと向かって行こうとします。そこに一人の盲人の物乞いがありました。バルテマイという人物です。彼はその道端に座っていました。そのとき、群衆のざわめきが聞こえ、足音が聞こえ、何かが起こっていると気づきました。聞いてみると、イエスがお見えになったと。そのときにこのバルテマイは大声で叫び始めるのです。マルコの福音書10：46-52に記されていますが、47節「**ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めた。**」と、余りにも大きな声で叫び続けるので周りの弟子たちは黙らせようとして、ところが、彼は黙るどころかますます大きな声で叫び続けるのです。「**ダビデの子よ。私をあわれんでください。**」と。すると、イエスはこのように言われます。49-50節「**あの人を呼んで来なさい。」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。」と言った。：50**すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、**イエスのところに来た。**」と彼は聞くだけでなかったのです。彼はイエスが言われたように行動したのです。

皆さん、私たちは聞くだけであつてはならないのです。そして、感謝なことに、あなたは神の前に弁解する必要がないのです。あなたの弱さは神がご存じです。一生懸命説明しなくても良いのです。神はあなたの不信仰も全部ご存じです。それでいて神は「わたしはあなたを助ける」と言われたのです。何のためでしょう？私たちが神の前に喜ばれる歩みをもって、神に喜ばれ神の栄光を現わす生き方をするためです。確かに、聖霊によって満たされる、支配されるという働きは神のわざです。しかし、そのためには、私たち自身がそのことを望んで「神さま、そのように私は生きて行きたい。そのように生きて行きます。」と選択して、そのような歩みを始めて行くことです。考えているだけでは何も起こらないのです。覚えているだけではダメなのです。私たちは主を、また主の約束を信じて歩き始めることです。そこに主の助けがあるのです。どうですか？信仰者の皆さん、あなたは立ち止まっていますか？いろいろな問題の中で、その難しい困難の中で歩み続けることを止めていませんか？あなたに必要なことは「主の約束を覚えること」です。神に支配していただきたいという願いをもって歩んでいるあなたが、「主よ、私は今日からもっとあなたにしっかり支配していただいて、私の思うことも考えることも私の口にする

ことも私の行動も、すべてがあなたに喜ばれたい。失敗の連続だったけれども、あなたの助けがあることを私は信じます。どうぞ、私を助けてそのような歩みを今から始めて行くことが出来るようにしてください。」と、そうして歩み出す決心がいます。主に満たしていただきたい、主によって支配されて歩んで行きたいと、その思いをもつのはあなたが神の子どもだからです。

ジョン・カルビンはこのように言います。「神の子と見なされるのは、ただ御霊によって導かれる者だけである。なぜなら、それこそ神がご自分の民を認める印なのだから。」と。救われている人の特徴は「主よ、どうぞ私を支配し続けてください。私のすべてを支配し続けてください。そして、あなたのすばらしさを証する器として私を使ってください。失敗ばかりだけれど、弱いけれど、言い訳するのは止めます。言い訳して立ち止まることを止めます。言い訳して後退することを止めます。あなたを信じて前に向かって進んで行きます。」と、そのようにして生きる者たちなのです。

あなたがそのような歩みをしておられることを心から願い、また、そうでなければ今からその歩みを為して行くことを心から勧めます。主を信じて、主の支配をいただきながら、主のために、主の栄光のために歩み続けてください。